

2003年出土の木簡



(魚津)

富山・水橋金広・中馬場遺跡

みずはしかねひろ なかばんば

- 1 所在地 富山市水橋清水堂
- 2 調査期間 11003年度調査 11001年（平15）10月～
11004年1月
- 3 発掘機関 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 鹿島昌也・安達志津・稻垣裕一
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 平安時代末～南北朝時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

水橋金広・中馬場遺跡は、富山市東部の富山平野に位置する集落

跡で、11003年度調査で

溝SD〇五

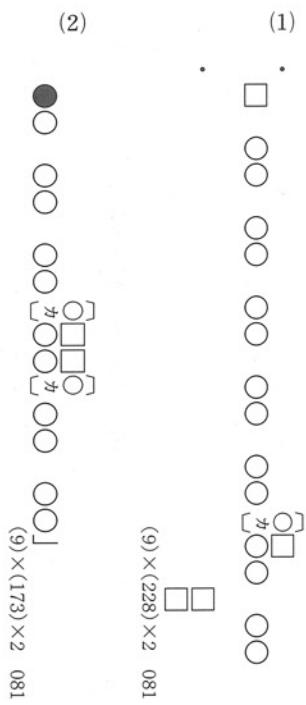
は平安時代末から南北朝時代の溝、掘立柱建物、井戸、作業場と推定される方形堅穴状遺構などを検出した。

溝には、幅約1・5m深さ約〇・六mの大溝SD〇五や、居住地を方形に区切る幅〇・七m深さ〇・一mの

区画溝がある。大溝SD〇五からは一点の木簡のほか、漆器、箸状木製品など多数の木製品、珠洲焼、土師器などが出土している。漆器は小皿が多く、亀甲紋と四つかたばみ、桐と竹などの文様が精緻に描かれている高級品である。区画溝からは珠洲焼、土師器のほか、青磁、白磁、越中では珍しい土師器の脚付き鍋などが出土している。

掘立柱建物は二間×三間以上など三棟以上が存在し、柱根が遺存しているものも多くあった。柱は角柱の角を面取りし、丁寧に加工している。井戸一四基のうち、縦板組隅柱横桟止めなどの何らかの施設を持つものが三基、他は素掘り井戸であった。縦板組隅柱横桟止めの井戸からは短刀、無紋の漆塗椀が出土している。木簡は直径〇・九五m深さ〇・九五mの素掘り井戸SE〇五から一点出土した。

8 木簡の釈文・内容



(3)

(4)

(76) × 27 × 1.5 081

(46) × 27 × 1.2 081

(1)は上・下端とも欠損、左右も割れている。(2)は上端と左右が欠損している。(1)(2)とともに直径五・五mmの○印が二個一組で記されている。(1)(2)は同一箇の断片と思われるが、接続関係は不詳である。また、(1)の文字の向きからすると、横材である。

(4) (3)は上・下端とも切損する。両面とも文字があるが判読できない。切り込みらしきものもあるがはつきりしない。表の文字は、「戸（しかばね）」をもつての文字、ないし符籤の可能性がある。

なお、祝読にあたっては、奈良文化財研究所の渡辺見宏氏、山本崇氏のご教示を得た。写真は、同研究所の中村一郎氏による。

(安達志津)

